

雑誌を読む

1月

森まゆみさん 立花隆さんの「孤独なリーダー」政治屋「小沢一郎」(文藝春秋)が面白かったんですが、...

中西輝政さん 立花論文のように、国内政治を論じる場合は主張を明確に打ち出して問題提起する姿勢が重要で...

橋爪 今回読んだもの多くは小沢さんを悪役にしていて、内容は政治家のたれだが、いつどこでだれとつじつとしたという事実関係を、...



左から中西輝政、橋爪大三郎、森まゆみの各氏

日本政治を論じる視点

政治全体が日本の文化性を無視して、そこから脱却しようとしているのかも... 森 政治家になった人を国会立の大学院で再教育する提案もありました...

◆ 私のお勧め 2点 ◆

(月刊誌はすべて2月号)

Table with 2 columns: Author (森, 橋爪, 中西) and Recommended Book/Article details.

◆ 読む・ガイド ◆

Table with 3 columns: Title, Author, and Summary of the article.

自由帳

いじめ対策は学校改革から... 木村氏は、清和事件を「いじめ」とみるのは間違...

いじめ対策は学校改革から... 木村氏は、清和事件を「いじめ」とみるのは間違...



# 雑誌を読む

2月

森まゆみさん 阪神大震災について  
は締り切りの関係か、ルポが多々、テレビの映像に負けるように思いました。一方、自衛隊の出動や危機管理についての議論は結論を急ぎすぎ、便乗の感も強いですね。

中西輝政さん 確かにテレビで見た光景を今度活字で読まされる感じがあって、一度も行ってないのに、神戸の町を何度も歩かされた気がしました。復興問題もありますが、社会経済面に与える、いわゆる第四次被害について今後真剣に取り上げてほしい。

橋爪大三郎さん 活字メディアならではの役割もある。この点で、野田正彰さんの「災害の構造・救援の思想」(世界)が、一人々の顔が見える報道が大切と指摘しているのが印象的でした。「文藝春秋」の「五千の死と三十万の生」(加賀孝英ほか)は、警察、消防、自治体、病院、住民の動きを客観的に捉えた手堅いルポです。取材で効率の裏付けをとり、全体像を再構成しようとしている。記者が興奮して書いた記事と写真が撮っているだけの週刊誌などは避けます。月刊誌はもう少しスタンスを持ってほしい。

森 私も野田さんの文章に感銘しました。精神医学者として被災者に次に何か必要かをいかに訴えていると思います。被災者を被災者の役割に押し込めてしまっている。不幸に型にされた人になってしまっている。不幸に型にされた、社会のネットワークに支えられ、もう一回自分の地域を歩むことができればならない。

「読む・ガイド」

野田正彰 「被災者がもう一回自分の地域を作れると思える援助を」

加藤尚武 「災害では最悪条件下での最善は何かという戦略が必要」

柳田邦男 「わが家の危機管理のために 是れは発想の転換が必要だ」

末山素路 「「関東大震災級」という呪縛が柔軟な対応を妨げる」

山根一真 「大震災が証明したパソコン通信の社会的役割の大きさ」

佐々淳行他 「まともな人材がいれば現行制度の運用で対応できた」

界屋太一 「21世紀の阪神、近畿にふさわしいビジョンある復興を」

大前研一、三浦雄一郎 「「知事連盟」結成で無党派層のための「地域国家」を」

山口二郎、福田和也 「国民を消極的受益者として 動員した1940年体制の克服」

佐伯啓思 「保守政治家と進歩派知識人が共に支えた戦後思考空間」

榊原英資 「戦後の重要な政策決定は決して官僚主導ではなかった」

松原隆一郎 「思想漫画が活字論壇と共生するためのルールと作法」

松園万亀雄、栗田博之他 「性の「常識」を覆す最新のフィールドワークの成果」

高橋源一郎他 「明治に生まれた文学、浮世絵、写真、ジャーナリズム」

Newsweek 「50年後の生存者の証言を改めて聞いた」

# 阪神大震災と現代社会



森まゆみさん



橋爪大三郎さん



中西輝政さん

やロコモが何ができるかも知りたい。

中西 「エコノミスト」(2/14) が株式市場や金融市場への波及を大胆に取り上げています。大震災は重要な問題なのに、これ以外には見かけません。こういう議論は日本では好まれません。絶対必要なのは、海外のメディアがホンネで一番気にしているのは金融システムへの影響です。

橋爪 今回ポランディアの活躍は、

中西 「諸君」の野田直雄さん、

「例外状態」における「国家」を論じている。これからは地域社会も例外状態にできない、という感じが感じました。野田さんは憲法体制という大きな議論をしていますが、もう一つは例外状態にどう対応できないか、という議論が、今回はポランディアだけが事態に素早く対応できた。国家も自治体もみんながポランディア精神を持たないというまじい社会になっていくという話ではないかと思う。国には法治主義の根がある。野田さんはそれを中央集権レベルの問題にしている。私は「地方分権」というより「地方国家」化によって、その枠を超えることができるか、と考えています。大げさな言い方、われわれは国家と地方の関係で世界的にみてどう違う時代に生きていくか、という話です。

森 コミュニティについても考えさせられました。個人を束縛するものではないか。

中西 「読む・ガイド」

野田正彰 「被災者がもう一回自分の地域を作れると思える援助を」

加藤尚武 「災害では最悪条件下での最善は何かという戦略が必要」

柳田邦男 「わが家の危機管理のために 是れは発想の転換が必要だ」

末山素路 「「関東大震災級」という呪縛が柔軟な対応を妨げる」

山根一真 「大震災が証明したパソコン通信の社会的役割の大きさ」

佐々淳行他 「まともな人材がいれば現行制度の運用で対応できた」

界屋太一 「21世紀の阪神、近畿にふさわしいビジョンある復興を」

大前研一、三浦雄一郎 「「知事連盟」結成で無党派層のための「地域国家」を」

山口二郎、福田和也 「国民を消極的受益者として 動員した1940年体制の克服」

佐伯啓思 「保守政治家と進歩派知識人が共に支えた戦後思考空間」

榊原英資 「戦後の重要な政策決定は決して官僚主導ではなかった」

松原隆一郎 「思想漫画が活字論壇と共生するためのルールと作法」

松園万亀雄、栗田博之他 「性の「常識」を覆す最新のフィールドワークの成果」

高橋源一郎他 「明治に生まれた文学、浮世絵、写真、ジャーナリズム」

Newsweek 「50年後の生存者の証言を改めて聞いた」

今回の大地震は、いろいろな点でわれわれの「常識」を問い直すことを迫っています。まずそれは、戦後日本の「常識」の見直しへとつながることになる。向うな心のなかに抱いていた単なるイメージ、それを入念に洗い直さなければならぬ。今、重要な点で見直されようとしている。この時代が一つの「常識」を生み出す。その常識が見直されるべき。その時代が新しい新秩序論として後継、全体が成り立たないことに退き、当時の「新秩序」論、書の多くも、明白に、ある冷戦の終焉は、自由で、

「歴史への回帰へ」

冷戦が終わり、そして湾岸戦争が終わって丸四年たつたが、当時の「世界新秩序」といわれたイメージも、近代西歐的な個人主義、

立った個人が支える市場経済と民主主義の普遍的価値の最終勝利を意味する、あれほどの高らかに論じたフクヤマだが、今はさきッリ「歴史への回帰」というテーマをとり始めている。今日の地震が一つの「歴史への回帰」を象徴していると思われるのは、あの遠くへポランディアの熱意ではないだろうか。ハラハラ個人とどうは「理想」の上に構築された「システム」だけでは人間の社会は築けない。心のつながり」という「人の輪」こそ、地震が教えてくれた歴史の贈りものなのかもしれない。(中西輝政)

ではなく、同じ町で暮らし、いざとなればお互い助け合っていく生活をしていくという風通しもよくて協力もあるコミュニティをどうやって作るのか。こういう議論はまだあまり出ていません。

中西 界屋太一さんが復興を論じています。「阪神大震災復興計画」Voice ほか。関東大震災の後藤新平にふれている。「大ぶつしき」といわれた後藤新平は最初に写真真ありきの行政主導型でしかも近代科学技術、巨大大都市をすべてよきよきとする価値観が確立していた時代ですが、現代は逆の流れが出ています。後藤新平型は力を持っていないのではないのでしょうか。

橋爪 現代都市・神戸は他の地域とのネットワークの中にあり、道路や新幹線を復旧してこのネットワークをつなぎ直し、また動き出すことがない。東京の半分が焼け野原になった関東大震災の状況も時代も違っています。

森 今回小学校が避難所になっていまして。上から一筆に作らざるではいけません。一緒に暮らす人たちが学区単位で地域の復興プランを作っていく。そういう場を作ることが行政が援助するべきだと思います。

◆ 私のお勧め 2点 ◆  
(「広告批評」以外の月刊誌は3月号)

森 ①規制緩和を語る資格は誰にあるか  
②「戦後民主主義」を探す

橋爪 ①親から子への「いじめ対策マニュアル」  
②「康夫ちゃん流ポランディア日記」

中西 ①六〇年代ノ運と比較するのは外れた  
②存在理由の消えた日米安保

森	①規制緩和を語る資格は誰にあるか ②「戦後民主主義」を探す	宇沢弘文、内橋克人 坪内祐三 諸君!	①人間の尊厳を守る立場から明快に自明の理を述べた。戦後の日本に必要とされるべき「常識」の再考を促す。
橋爪	①親から子への「いじめ対策マニュアル」 ②「康夫ちゃん流ポランディア日記」	田中雄二 中央公論 田中康夫 週刊SPA! 2/15	①メモ・写真の力を活用し、親と子の対話の例を挙げた。②500円日用品を節約するアイデアが面白い。
中西	①六〇年代ノ運と比較するのは外れた ②存在理由の消えた日米安保	畠山俊 中央公論 E・A・オルセン 諸君!	①アジアの成長は幻想といふ。米学者への対話。②日米安保の将来について対話。

災害の構造・救援の思想	野田正彰 世界	被災者がもう一回自分の地域を作れると思える援助を
日本的災害観の誤り	加藤尚武 中央公論	災害では最悪条件下での最善は何かという戦略が必要
覆った「常識」	柳田邦男 諸君!	わが家の危機管理のために 是れは発想の転換が必要だ
保険はどこまで財産を守ってくれるか	末山素路 宝石	「関東大震災級」という呪縛が柔軟な対応を妨げる
マルチメディアが救った情報「空白」の危機	山根一真 文藝春秋	大震災が証明したパソコン通信の社会的役割の大きさ
検証・阪神大震災 危機管理なき日本	佐々淳行他 エコノミスト 2/21	まともな人材がいれば現行制度の運用で対応できた
「阪神大震災」復興計画	界屋太一 Voice	21世紀の阪神、近畿にふさわしいビジョンある復興を
新・薩長連合結成宣言	大前研一、三浦雄一郎 文藝春秋	「知事連盟」結成で無党派層のための「地域国家」を
「戦後」を興味にしたのは誰だ	山口二郎、福田和也 中央公論	国民を消極的受益者として 動員した1940年体制の克服
戦後知識人の「あいまいさ」	佐伯啓思 THIS IS 読売	保守政治家と進歩派知識人が共に支えた戦後思考空間
性懲りもない日本異質論者たちへ	榊原英資 発言者	戦後の重要な政策決定は決して官僚主導ではなかった
「ゴーマニズム宣言」と活字論壇	松原隆一郎 正論	思想漫画が活字論壇と共生するためのルールと作法
大シンポジウム 性の人類学	松園万亀雄、栗田博之他 現代	性の「常識」を覆す最新のフィールドワークの成果
特集・明治誕生 近代メディアの夜明け	高橋源一郎他 広告批評 2月号	明治に生まれた文学、浮世絵、写真、ジャーナリズム
戦後50年 生存者の証言をつづるアウシュビッツ	Newsweek 日本版 1/25	50年後の生存者の証言を改めて聞いた

自由帳

今回の大地震は、いろいろな点でわれわれの「常識」を問い直すことを迫っています。まずそれは、戦後日本の「常識」の見直しへとつながることになる。向うな心のなかに抱いていた単なるイメージ、それを入念に洗い直さなければならぬ。今、重要な点で見直されようとしている。この時代が一つの「常識」を生み出す。その常識が見直されるべき。その時代が新しい新秩序論として後継、全体が成り立たないことに退き、当時の「新秩序」論、書の多くも、明白に、ある冷戦の終焉は、自由で、

「歴史への回帰へ」

冷戦が終わり、そして湾岸戦争が終わって丸四年たつたが、当時の「世界新秩序」といわれたイメージも、近代西歐的な個人主義、

立った個人が支える市場経済と民主主義の普遍的価値の最終勝利を意味する、あれほどの高らかに論じたフクヤマだが、今はさきッリ「歴史への回帰」というテーマをとり始めている。今日の地震が一つの「歴史への回帰」を象徴していると思われるのは、あの遠くへポランディアの熱意ではないだろうか。ハラハラ個人とどうは「理想」の上に構築された「システム」だけでは人間の社会は築けない。心のつながり」という「人の輪」こそ、地震が教えてくれた歴史の贈りものなのかもしれない。(中西輝政)

ではなく、同じ町で暮らし、いざとなればお互い助け合っていく生活をしていくという風通しもよくて協力もあるコミュニティをどうやって作るのか。こういう議論はまだあまり出ていません。

中西 界屋太一さんが復興を論じています。「阪神大震災復興計画」Voice ほか。関東大震災の後藤新平にふれている。「大ぶつしき」といわれた後藤新平は最初に写真真ありきの行政主導型でしかも近代科学技術、巨大大都市をすべてよきよきとする価値観が確立していた時代ですが、現代は逆の流れが出ています。後藤新平型は力を持っていないのではないのでしょうか。

橋爪 現代都市・神戸は他の地域とのネットワークの中にあり、道路や新幹線を復旧してこのネットワークをつなぎ直し、また動き出すことがない。東京の半分が焼け野原になった関東大震災の状況も時代も違っています。

森 今回小学校が避難所になっていまして。上から一筆に作らざるではいけません。一緒に暮らす人たちが学区単位で地域の復興プランを作っていく。そういう場を作ることが行政が援助するべきだと思います。



1995-7-③/18

雑誌を読む

3月

中西輝政さん 震災については、先月の総合雑誌は危機管理や復興問題など直接的な課題を取り上げていたが、今月は日本という国家のあり方や社会の本質など、より広い視野から取り上げたものが多くなっています。しかし、中にはエモーショナルな議論もあり、対談「戦後の敗戦」(Voice)で野坂昭如さんは集団行動の訓練のために徴兵制が必要だと言っています。焼跡跡を見るたびに大きく針が刺さっているようで、震災後の精神的パンクがもしもせんが、均衡を欠いてはならないと思います。

山下悦子さん 比較的若い世代の橋本治さんが「それでもまた日本人は、この揺れる大地を私有しなければならぬのか」(広告批評)で私権の制限を主張しています。危機管理や個人の命を救えなかった国家を批判するのでは大切ですが、強い国家権力に安易にゆだねてしまっているのではなかろうか。五十年前とは違って市民社会の成熟があり、きつとした個人が形成されつつあるとはいえ、まだまだ大半の人々は「お上」に頼り、国や会社のために滅私奉公しているのが現状です。

橋爪大三郎さん 橋本さんは「まともな国家」の必要性を主張しています。彼が言う私権の制限とは、壊れかけた家を国がきつめて建て直し住宅を建てるといったことです。私権を制限する国家が大きな権力を持つことは戦後日本ですとタープでしたが、彼はそれを問い直している。強い機動的な国家をなければ災害の時に弱い者は生きていけないようになってしまっていることを指摘して、ある意味で率直な本音が出ています。

中西「まともな国家」が必要という結論には賛成ですが、国家権力の巨大化は問題がなくて、国家権力の無能だけが問題だというや断定的な言い方が気になる。国家権力というのはチェックを怠れば必ず肥大して、問題を引き起こす、という原点的思考は忘れるべきでない。確かにシステムを築る必要はあるが、性急なあまり必要なチェックを放棄したら民主主義の

自由帳  
先日、アメリカの某誌の女性記者から突然、「田高が死んでいるが、このことについてどう思うか、日本社会への影響は」といったインタビューの申し込みを受けた。私は経済学者ではないし、八八円台を一時はいき記録した異常な円高が今後、どのような形で私達の生活に影響を与えてくるのか、今の時点ではわからないと答え、即、断った。すぐに電話を切るのもつれないと思ひ、数分の間、

理念だけの国家論は危険  
アスな話題ばかりだった。感があった。国家について外国語の方が社会の見方が現実的だというのがあった。現実的だというのが、理念や言葉だけが先走るの危険だということ。兵庫県原田良知事、復讐計画の時に初めて「住宅の価格破壊を推進」という言葉を使ったことだ。(山下悦子)

「震災後」の国家と社会



中西 輝政さん



山下 悦子さん



橋爪大三郎さん

「市民」という認識をもつことが重要だと思います。個人を最低限守るシステムは市民社会の中で作られるべきです。日本の場合、戦後のファシズムの時代があり、戦後も国家や企業社会が個人を大事にしてこなかった。特にサラリーマンの妻たちはそういう実感を持っています。大震災ではその心づきが現れた気がします。

◆ 私のお勧め 2点 ◆

(注記した以外の月刊誌は4月号)

Table with 3 columns: Author, Title, and Content. Includes entries for 橋爪, 中西, and 山下.

◆ 読む・ガイド ◆

Table with 3 columns: Title, Author, and Content. Lists various articles and their authors.

雑誌を読む

4月

橋爪大三郎さん オウム真理教をめぐっての事件ではテレビの軽薄な対応が目立ちました。視聴率のことだけを考へて、教団幹部の生出演を戦略にはあつてしまふ。麻原彰晃代表との単独会見スクープが欲しいので、窓口になる幹部との関係を切れない。そこで、本来追及される立場の教団が逆に攻勢に出るかたちになってしまふ。これは残念です。

中西輝政さん センセーションナルで怪奇趣味を含めたものが先行している一方、教団幹部に過度に弁明や正当化の機会を与えている。メディアの基本的あり方から言えば、どちらでもあってはならないことです。

山下悦子さん アエラ(4/17)の「テレビが負けてオウムが勝った」が印象的でした。「オウムの主張をたれ流すだけのテレビ布教になった」と上川紹子さんがコメントしています。上川さんや青木保さんが女性に人気があつて、視聴者がそのイメージ、経歴なども含めて魅力を感じてしまふ、という問題もあります。

メディアの中の「オウム」



橋爪大三郎さん



中西輝政さん



山下悦子さん

橋爪 報道番組でワイドショーの境界があいまいになってしまったことが問題です。報道は報道としてのスタンスを持ってほしい。教団幹部の言動を聞きながら、真実がどうかを追及し、視聴者に問いかける必要がある。よかつたのはニュースウィークの一連の特集(4/5など)で、問題の本質を浮き出させるために外国のカルト教団やテロリストについての既存の情報を整理して事件の特色を描いていた。非常に手慣れた報道ぶりです。日本のメディアは毎回一からの勉強で報道機関としての情報の蓄積、整理ができていない。

橋爪 報道番組でワイドショーの境界があいまいになってしまったことが問題です。報道は報道としてのスタンスを持ってほしい。教団幹部の言動を聞きながら、真実がどうかを追及し、視聴者に問いかける必要がある。よかつたのはニュースウィークの一連の特集(4/5など)で、問題の本質を浮き出させるために外国のカルト教団やテロリストについての既存の情報を整理して事件の特色を描いていた。非常に手慣れた報道ぶりです。日本のメディアは毎回一からの勉強で報道機関としての情報の蓄積、整理ができていない。

◆ 私のお勧め 2点 ◆

(注記以外の月刊誌はすべて5月号)

Table with 3 columns: Author, Title, Content. Includes entries for 橋爪, 中西, and 山下.

◆ 読む・ガイド ◆

Table with 3 columns: Author, Title, Content. Includes entries for 高木保, 野田正彰, 江川紹子, etc.

自由帳

東京で青島幸男氏、大阪で横山ノック氏が知事に当選、「無党派勝利」の見出しが躍った。石原氏を都知事に推した連立与党が、本意を向かれたわけだが、本意の敗者は候補者を立て(られ)なかった新進党だ(と願う)。

新進党・党づくりの課題

「浮動票」などと軽く見られてきた層が、「無党派」という立派な実体で、あるかのように言われ始め、無党派が既成政党を打ち破ったという図式である。だが、そんな実体などあるのか、かつて社会党をふくらませることもあつた。今後、要する。野田さんが指摘したように、この社会におけるさまざまな矛盾の解決に取組む「理想」が重要だと思ひます。

山下 「青島30」の特集に「オウムにはオタク心をくすぐる何かがある」という記述がある。最近、二十、三十代の医学部生や理科系の人と接すると、専門以外のことはほとんど知らないオタク系の人が多い。ある有名な進歩派ではオウムのマインドコントロールに似たようなことが行われています。テクノロジーばかり身につけたロボットのような無感情な子供が育つてしまふのは未来は暗い。ゆがんでいるのはオウムだけでなく、日本社会のありかたにあります。



雑誌を読む

5月

橋爪大三郎さん オウム問題に関し...



右から橋爪大三郎さん、山下悦子さん、中西輝政さん

オウム事件と日本社会

オウム事件に目を奪われ... 「日米」悲観論の克服を... 橋爪大三郎さん...

◆ 私のお勧め 2点 ◆

(注記した以外の月刊誌はすべて6月号)

Table with 3 columns: Author, Title, and Recommendation. Includes entries for 橋爪, 中西, and 山下.

◆ 読む・ガイド ◆

Table with 3 columns: Title, Author, and Summary. Lists various articles and their authors.

橋爪大三郎さん オウム事件と日本社会... 橋爪大三郎さん、山下悦子さん、中西輝政さん...



雑誌を読む

7月

中野輝政さん 日米自動車交渉が決裂し、大きな関心を呼んでいます。世界の論議は、米国の一方的制裁が国際ルール違反だという点について明確な一致がありますが、日本市場が開鎖的だという点でもかなり一致してしま...

東郷茂彦さんの「日米自動車競争勃発す」(文藝春秋)は日本の自動車市場の開鎖性に焦点を当てています。E・フィングルトンの「日本が宣言する『日本没落説』」(中央公論)は、日本が経済的状況に可成り苦しんでいるのはなく、西暦二千年までに世界一の経済力を持つようになるとして、日米関係の背景を大きな視野から論じています。日米同盟については全体に悲観論が多々その典型が東洋経済6/10の「特集『日米同盟』の危機」です。私は日米安保体制は当然の間、両国の利益にあって不可欠という立場です。...



中西 輝政さん



山下 悦子さん



橋爪大三郎さん

「冷戦後」の日米関係

切り離せと提言していますが、ナイ・イニシマチン、米国の主流ではない。日本の黒字が米国の困難の元凶であるという世論が強まれば、経済と安保は別たして日本の論理が米国民に政府に受け入れられるかどうかは微妙になる。もっと腹を割って高度な次元からこの問題を考えていかなければならぬ。...

山下悦子さん 私は逆に、日米関係については多少の危機感を持たなければならぬと思います。柄谷行人さんと加藤節さんの対談『未完の近代』を生きた想像力(世界)で、柄谷さんが、大震災とサリン事件がマスメディアを覆い尽くして、普通なら重大な話題になる問題が相対的に隠されてしまったと指摘しています。例えば二信組問題をめぐる政界スキャンダルや東京・大阪知事選挙にみられる代表制の危機、国際金融危機や日米経済対立などです。柄谷さんはこれらは地...

切っても切れない関係にあることも無視できない。一九六〇年に改定された日米安保条約には経済条項があり、経済的相互共存が規定されています。経済と安保が一体のものとして日米同盟がある。冷戦期には米国の日本の経済発展を片目をつぶって後押ししていたのですが、共通の敵であるソ連が消滅した今では安保を理由に日本のわがままを聞くことができない。ジョセフ・ナイ米国防次官補が、経済と安保を...

◆ 私のお勧め 2点 ◆

(月刊誌はすべて7月号)

Table with 2 columns: Author/Topic and Recommendation. Includes entries for 橋爪 (審議会は隠れ蓑である), 中西 (宗教教育が「怪力乱神」を防ぐ), 山下 (「未完の近代」を生きた想像力).

◆ 読む・ガイド ◆

Table with 3 columns: Title, Author, and Content Summary. Includes entries like 「日本も米国も「宿題」をやれ」 by 高坂正彦, 「日米自動車競争勃発す」 by 東郷茂彦, 「特集 『日米同盟』の危機」 by 市川周他.

自由帳

青島都知事と「公約」

オウム報道がまたまた続々「Bar」(6月26日号)が「頑張り青島都知事」という人々にわたる特集をくんでいっているのが目を引いた。都民百人への緊急アンケート調査を実施しているせいか、説得力もある。世界都市博覧会をめぐって青島都知事と議会が対立の末、五月三十一日、中止決定となったのは周知のとおり。賛否両論いろいろある中、この雑感を決めることとらざるに、この雑感を決めることとらざるに、都知事が「公約」を実現させたいと答えたことは、民主主義の原点を回復させる意味でも、価値のある行動だと私は思う。...



雑誌を読む

7月

中西輝政さん 戦後五十年の国会決...

橋爪大三郎さん 総合雑誌のそれな...

国会決議と戦争責任論



中西 輝政さん



橋爪大三郎さん



山下 悦子さん

と云っているのが、なるほどと思...

あけられているかを十分に議論して...

山下 新しい世代は過去の歴史を客...

◆ 私のお勧め 2点 ◆

(注記した以外の月刊誌はすべて8月号)

Table with 3 columns: Author, Title, Content. Includes entries for 橋爪, 中西, and 山下.

◆ 読む・ガイド ◆

Table with 3 columns: Author, Title, Content. Includes entries for 北岡伸一, 加藤典洋, 宮崎哲弥, etc.

自由帳
ある日はディベート、あがりてホクホク顔の者。決...

グループ・ワーク

プに分かれてがやがや、まじいか否か、新聞の社説や...



雑誌を読む

8月

中西輝政さん フランス、中国の核実験に対する反対運動が盛り上がり...

中・仏核実験と被爆50年



中西 輝政さん



橋爪大三郎さん



山下 悦子さん

ルギーについても同様です。橋爪 だが、吉田康彦さんが「核廃絶は『夢の夢』」(軍縮問題資料)で指摘しているように、原爆がある限り...

橋爪 越智道雄さんの「アメリカはなぜヒロシマを恐れるのか?」(宝島30)が面白い視点を示しています。無敵の最終兵器を手に入れたアメリカが、同時にそれを使えなくなり、全能感と無能感にでき裂かれた。道徳面を不問に付したまま原爆を使ってしまったことに負い目を持ったという。一方...

中西 ロナルド・タカキなど最近の米国では原爆投下についての歴史の書き換えを試みる人が増えています。ロンドン・エコノミスト(Economist)が「原爆の罪と恥」と題する社説で、女性今になって急に旧連合国世論が原爆投下を反省しているのかわからない、と驚きをもって論じていますが、この変化の背景には人間の倫理観の歴史的な変化があるのかもしれない。

◆ 私のお勧め 2点 ◆

(注記した以外の月刊誌はすべて9月号)

Table with 3 columns: Author, Title, and Description. Includes entries for '特集・その後のオウム真理教' and '始動したアジア発展・安定化モデル'.

◆ 読む・ガイド ◆

Table with 3 columns: Author, Title, and Description. Includes entries for 'アメリカは原爆をこう教えている' and 'アメリカはなぜヒロシマを恐れるのか?'.

自由帳
八月は日本人にとって、どうしても「歴史の回想」という儀式的季節になってしまふ。しかも、近年は若い人への歴史教育の回帰を続けてきたため、「風化」する歴史がさらに進んでいる。しかし世界には今、「回帰する歴史」の渦がある。...







# 雑誌を読む

10月

## ◆ 私のお勧め 2点 ◆

(注記した以外の月刊誌はすべて11月号)

橋爪	①特集・銀行の真相 ②毛沢東のベトナム戦争	週刊ダイヤモンド 10/21 朱建栄 中央公論	①支店長の年収1600万円～2000万円、各行危険度ランキングなどの舞台裏 ②ベトナム要人インタビューや新資料で歴史の分岐点を検証
	①文化の「アジア合衆国」をつくろう ②脱欧入亜の議論はもう古い	斉藤英介 THIS IS 読売 渡辺泰造 外交フォーラム10月号	①アジアに起きている変化をどんな解説書より雄弁に伝える ②アジア本来の開放性とグローバル性を明快に論じる
山下	①東村山市議怪死のミステリー ②無罪の衝撃	乙骨正生 文藝春秋 ニュースウィーク 10/18	①「草の根」市民グループの無党派女性市議の死を徹底的に追う ②O・J・シンプソンを無罪にした米社会の問題点を冷静に検証

## ◆ 読む・ガイド ◆

日本はアジア太平洋時代の「接着剤」となれ	竹中平蔵 アステイオン秋号	多国間外交のために大胆な政治・経済・社会の改革を
「中華帝国」が握る東アジアの新秩序	野田宣雄 THIS IS 読売	新たな形の「中華帝国」形成の条件が生まれつつある
「太平洋国家日本」の構想	市川 周 THIS IS 読売	日本は非華人・海洋性国家としての求心力を追求せよ
対談・アジア像の見直し	西部邁、宮本光晴 発言者	「アジアは同じ」の誤解からの経済進出は危険を招く
台湾民主化の国際的波紋	若林正文 発言者	中国指導部は再び鄧小平時代の現実主義に戻るべきだ
「アメリカ兵の犯罪」の波紋	ニュースウィーク 10/4	沖縄の怒りは本土に伝わらなかったが、今回は違う
沖縄を踏みこじめるのは誰だ	仲座藍、新崎盛暉 他 週刊金曜日10/6	小学生レイプ事件は米軍基地ある故の悲痛な出来事
公安調査庁は何をしてきたか	菅沼光弘 文藝春秋	破防法で注目した日本版CIAの素顔を元幹部が語る
小沢一郎 追いつめられた改革者	E・デズモンド 中央公論	ポスト冷戦時代を担った政治家として評価すべきだ
座談会・日本は世界をどう見てきたのか	猪木武徳他 中央公論	代表する論文で戦後日本人の自己認識を振り返る
対談・戦後50年 記憶の地平	安丸良夫、C・クラック 世界	歴史家は記憶の単純化に絶えず異議申し立てをすべき
あれは「間違った戦争」だったのか	村上兵衛 正論	H・ミヤーズ「アメリカの鏡・日本」をいかに読むか
丸山眞男と近代の超克	高瀬秀次 諸君!	全集刊行で再脚光を浴びる丸山における近代の意味
メディア・ウォーズと「全体主義」の時代	越智道雄 宝島30	高度管理社会進展を示すアメリカ巨大メディア買収劇
「へんなカッコ」するという快楽	SPA! 10/18	ヘソ出し・パンツ出し・コスプレ……が語る若者意識



左から橋爪大三郎、山下悦子、中西輝政の各氏

# 成熟期迎えた「アジア論」

「脱欧入亜」の議論はもう古い。外に目を向けてアジアを眺めよう。その中に中国がどう位置づけられるか、という問いがある。

左から橋爪大三郎、山下悦子、中西輝政の各氏が、9月10日、東京の「この国」で、中国の「脱欧入亜」論をめぐって議論した。橋爪氏が「中国はもうアジアの一部」と述べたことに、山下氏が「中国はもうアジアの一部」と述べたことに、中西氏が「中国はもうアジアの一部」と述べたことに、各々がそれぞれの見解を述べた。

「中国はもうアジアの一部」という問いは、中国の国際化が進む中で、中国がアジアの中でどのような位置づけを占めるか、という問いである。中国は、アジアの中で、従来のように「脱欧入亜」論で知られていたように、アジアから離れていくのではなく、アジアの中に入っていく。そのためには、中国がアジアの中で、どのような役割を果たす必要があるのか、という問いである。

橋爪氏は、中国が「脱欧入亜」論から「アジア論」へと移行していることを指摘し、中国がアジアの中で、従来のように「脱欧入亜」論で知られていたように、アジアから離れていくのではなく、アジアの中に入っていく。そのためには、中国がアジアの中で、どのような役割を果たす必要があるのか、という問いである。

山下氏は、中国が「脱欧入亜」論から「アジア論」へと移行していることを指摘し、中国がアジアの中で、従来のように「脱欧入亜」論で知られていたように、アジアから離れていくのではなく、アジアの中に入っていく。そのためには、中国がアジアの中で、どのような役割を果たす必要があるのか、という問いである。

中西氏は、中国が「脱欧入亜」論から「アジア論」へと移行していることを指摘し、中国がアジアの中で、従来のように「脱欧入亜」論で知られていたように、アジアから離れていくのではなく、アジアの中に入っていく。そのためには、中国がアジアの中で、どのような役割を果たす必要があるのか、という問いである。

「脱欧入亜」論はもう古い。外に目を向けてアジアを眺めよう。その中に中国がどう位置づけられるか、という問いがある。

橋爪氏の「脱欧入亜」論は、中国がアジアから離れていくことを目指していた。しかし、中国の国際化が進む中で、中国がアジアの中で、従来のように「脱欧入亜」論で知られていたように、アジアから離れていくのではなく、アジアの中に入っていく。そのためには、中国がアジアの中で、どのような役割を果たす必要があるのか、という問いである。

山下氏は、中国が「脱欧入亜」論から「アジア論」へと移行していることを指摘し、中国がアジアの中で、従来のように「脱欧入亜」論で知られていたように、アジアから離れていくのではなく、アジアの中に入っていく。そのためには、中国がアジアの中で、どのような役割を果たす必要があるのか、という問いである。

中西氏は、中国が「脱欧入亜」論から「アジア論」へと移行していることを指摘し、中国がアジアの中で、従来のように「脱欧入亜」論で知られていたように、アジアから離れていくのではなく、アジアの中に入っていく。そのためには、中国がアジアの中で、どのような役割を果たす必要があるのか、という問いである。

## 自由帳

「自由帳」は、読者の声や意見を募集するコーナーです。読者の声や意見を募集するコーナーです。

## 三峡の巨大ダム

三峡の巨大ダム建設は、環境破壊反対を合言葉に、開発に待ったをかけようとする動きが出てきた。環境破壊反対を合言葉に、開発に待ったをかけようとする動きが出てきた。

三峡の巨大ダム建設は、環境破壊反対を合言葉に、開発に待ったをかけようとする動きが出てきた。環境破壊反対を合言葉に、開発に待ったをかけようとする動きが出てきた。

三峡の巨大ダム建設は、環境破壊反対を合言葉に、開発に待ったをかけようとする動きが出てきた。環境破壊反対を合言葉に、開発に待ったをかけようとする動きが出てきた。



雑誌を読む

11月

山下悦子さん 沖縄の少女暴行事件について、沖縄出身の与那原さんが「ひめゆりの物語はもういらぬ」(宝島30)を書いています。ヤマト(本誌)の沖縄への感情を沖縄の本土へのルサンチマン(怨念)をともに批判して、沖縄人は沖縄人自身の物語を紡ぐべきだと言っています。新しい時代の視点として印象的でした。

中西輝政さん 兼田憲三さんの「沖縄」に生きる人々の怒り(潮)は、沖縄を犠牲にして達成された戦後日本の繁栄を指摘しています。冷戦が終わって日米安保見直しや安保再定義が論議される一方、時代が変わっても変わらないものがあることを忘れていた。日米地位協定について、岡崎久彦さんはこれを交えた日米関係に危機が起きていると言います。「安保廃棄は日本を滅ぼす」サンサーラ。しかし、なぜ交えられないのか、という議論を筆者は知りたところです。地位協定や沖縄への基地集約の問題と今回の少女暴行事件はやはり内在的に結びついていて、兼田さんのルポが伝える人間の気持ちは冷戦後の時代、重要性を増しています。

我が事としての安保



山下悦子さん



中西輝政さん



橋川大三郎さん

兼田さんのルポがこうした沖縄の人々の抗議の感情に比較的確直に同調したものです。木村英雄さんの「横須賀から見た沖縄少女暴行事件」(中央公論)は、もう少し冷静な対処の仕方があるのではないかと述べていますが、横須賀というよりは米軍基地をかかえる立場からの発言です。長年しいたけられてきた沖縄の怒りは本土の人間に

てきたのであって、感情のコントロールが大切なと強調していますが、これは大事なポイントです。ただ、実際には難しいことだとも思いました。山下「宝島30」の島津友美子さんのリポート「米軍とレイプ」が在日米軍の性犯罪率の異常な高さが大きな問題と指摘しています。これはアメリカの社会そのものがかかえる問題でもあります。安保の問題と切り離してこの点を考えることが重要だと思います。橋川 安保見直し論では、軍縮・基

は日本人の感情論が爆発して日本は核武装するだろうという内容です。一方外交問題のフロアである兼田さんと岡本さんは日本が核武装するなんて絶対ありえないという議論です。中西 冷戦後の「敵を失った同盟」は長期的には存在が問われます。短期的には新しい敵を見つけたということがあるわけですが、木村英雄さんのように、そこで「中国」と素直にボーンと出している人がいる。「中国の脅威」をうたうことは確かに当面日米安

日米安保条約の意味を評価しています。こういう議論は国民感情には受け入れやすいのではないのでしょうか。中西 今回の議論を通じて見えてきた日本の日米安保支持勢力の変化は予想外でした。先の世論調査の結果もそうですが、この数年の間に日本人の底流でアメリカに対する感情の変化が生じていたように思います。本間長世さんの「知識人における『嫌米』の系譜」(Ronza)は近年の日本の知識人にみられる嫌米の傾向を指摘していま

すが、私は湾岸戦争の影響が大きかったと思う。そこに日米経済摩擦などが重なってアメリカへのやりきれない思いがたい積りがあったのだと思います。橋川 アメリカとの同盟は戦勝国に対する敗戦国の独立の条件だったわけです。日本人が主体的に選択したものではありません。だから、日本が経済的に強大になった時点で、米軍基地が質的変化するべきだった。本来、同盟の質が変化するに連れて、米軍基地が沖縄に集中している現実も同盟関係が更改されていない状況の象徴です。日本が日米同盟を維持するとして、決断をするなら、基地を本土に適正に再配置するべきを改めて考え直すべきです。そういうことを議論していくことが日米安保の再定義だと思います。山下 知識人の嫌米意識といっても、たゞ女性解放の面でもアメリカ的な文化や生活は目標だったし、あそこがたまたまわけですから、ちょっと違う気もするのですが、中西 安保があろうがなからうが、日本にとってアメリカは太平洋を挟んだ重要な隣国なのです。橋川 確かに日本は最も重要な隣国同士で、だからこそ安保条約という枠組みがある。西国関係のすべてを安保に託するのは論理の逆立ちです。

◆ 私のお勧め 2点 ◆

(注記した以外の月刊誌はすべて12月号)

山下	①麻原彰晃・出生の謎 ②住友・大和と「超」金融再編全予測	中島渉 宝島30 エコノミスト 11/21	①三重苦の真相究明。韓国まで調査に行ったのは立派 ②大和銀行事件はオウム以上の大問題という気分に
中西	①座談会・アジア文明のリンケージ ②「水河期」に入った日露関係	中嶋嶺雄、渡辺利夫他 世界 Voice	①アジアの普遍性と多様性をめぐる本格的討論 ②ロシアへの無関心が将来の禍根にならぬために
橋川	①日米安保は永遠ならず ②野茂英雄とアメリカ人	中西輝政 Voice D・ハルバースタム 現代	①日本人は感情をコントロールし、戦略的奥手案を ②アメリカ人は外国の人間が活躍すると幸福になる

◆ 読む・ガイド ◆

ひめゆりの物語はもういない	与那原恵 宝島30	本土にはできない発想にもとづく沖縄人自身の物語を
米軍は撤退し、日本の核武装が始まる	副島隆彦 宝島30	日本人は国際政治の「大きな現実」を見つめるべきだ
「沖縄」に生きる人々の怒り	兼田憲 潮	沖縄の怒りは日本政府の無責任無策に向けられている
安保廃棄は日本を滅ぼす	岡崎久彦 サンサーラ	日米同盟さえガッチリしていればアジアは安定する
横須賀から見た沖縄少女暴行事件	木村英雄 中央公論	横須賀住民の反基地闘争はない。政治の力こそ重要だ
安保 やめるか残すか	浅井基文、岡本行夫 Ronza	ともに元外交官。安保再定義の必要性では一致するが
知識人にみる「嫌米」の系譜	本間長世 Ronza	浅薄なアメリカ理解が広がる今日は「日本の禍機」か
「安保の呪縛」を葬る時がきた	石川好、寺島実郎 現代	いまこそ逃げることなく勇気をもって安保の議論を
古い友への手紙	都留重人 世界	日米安保見直しは相互信頼の世界実現への重要な一歩
基地沖縄と日本人	平田綾子 This is 読売	地元紙記者が伝える沖縄県民の積み重なった不満とは
わが家で楽しくコンピュータ	ニュースウィーク 11/8	難しそうと思っている人へのゼロから始めるガイド
インターネット・ビジネスの全て	週刊東洋経済 11/11	電子マネー、銀行不要論など最新線をレポートする
「情報通信後進国」からの脱出宣言	鈴木興太郎、南部鶴彦他 中央公論	制度改革、市内電話市場の徹底した自由化などを提言
特集・半導体産業の興亡	井場浩之他 エコノミスト10/31	マルチメディアブームで沸く業界。日本はどうなるか
対談・パイオホラーに映る日本	養老孟司、米本昌平 広告批評11月	解剖学者と科学史家。2人にはなぜ何が映っている？

自由帳

大学の秋は忙しい。その忙しさの中で、何とかがやりくりをつけて、トルコへ出かけてきた。十月にインドネシア、十一月にトルコ、いずれも公的な所用もあつたのだが、この機会に是非、この西国を見ておきたいという関心も大きかったからである。東西数千キロをへたてて位置する西国だが、ともにイスラム圏に属しつつも、それぞれ独自のやり方で世界の近代化に取り組んできた。そのこの何十年かの間

冷戦構造の中で、それぞれの「安定勢力」としての重要な役割を演じてきた点も共通している。周知の通り、インドネシアは東アジア一円の成長の大波に乗りこめ、まじい発展を続けた。その一方で、成長そのものの意欲が、成長そのものの原動力となった開発主義的「権威主義」という「まなき」を破って進もうとするのかどうか。

トルコの「岐路」は、もつと痛みの多いものである。冷戦が終わって、長年夢に見てきた「欧州の一員」とも見えるのである。(中西 輝政)

「岐路」に立つ二つの国

保の活力を増すことにはなるでしょうが、同盟の本来の目的である安全保障にとつて結局マイナスだと思ふ。中嶋嶺雄さんは今世紀中にも中国が民主花を指摘しています。「米中新冷戦」の時代「Voice」。

トルコの「岐路」は、もつと痛みの多いものである。冷戦が終わって、長年夢に見てきた「欧州の一員」とも見えるのである。(中西 輝政)







# 「売れ筋」路線と歴史感覚

中西 論文は活字にできぬようにレベルは低くない

森 言論の自由から言えば、いろいろな意見が載っていいのですが、載せるかどうかを決める判断と、載せた場合に責任を取ることも大事です。解任したからといって編集長を記者会見に出さないのはおかしいし、広告の圧力と国際問題になったからと、すぐ廃刊するのも安易です。文藝春秋としては、どこが間違っていたのか、どこが公正さを欠いていたのかを、公表していく責任があります。

## 「マルコポーロ」廃刊

橋川 文藝春秋の「マルコポーロ」が廃刊になりました。問題になった2月号の「ナチ「ガス室」はなかった」は、間接情報に基づき、はきしただけのもので、その間接情報にどういったバイアスが加わっているかにも無頓着な、レベルの低い文章です。そういう記事を面白い素材だとして雑誌に載せた編集部は、ジャーナリズムとしてのスタンスの甘さ、変な方向を向いた「売れ筋」路線、そこに非常に深刻な問題があります。それが「マルコポーロ」だけの問題ではないところに危機感を覚えます。

森 言論の自由から言えば、いろいろな意見が載っていいのですが、載せるかどうかを決める判断と、載せた場合に責任を取ることも大事です。解任したからといって編集長を記者会見に出さないのはおかしいし、広告の圧力と国際問題になったからと、すぐ廃刊するのも安易です。文藝春秋としては、どこが間違っていたのか、どこが公正さを欠いていたのかを、公表していく責任があります。

# 日米間の認識ギャップ

中西 アメリカの Smithsonian 博物館の原爆投下の展示についての議論がある一方で、原爆のキノコ雲をデザインした切手の問題が話題になりました。「世界」の袖井林二郎さんの論文(原爆投下の歴史と政治)が二つの問題の違いをよく整理して、原爆展示についても米国の議論の具体的な経過をくわしく紹介しています。日本での議論はこういうことが伝えられた瞬間に感情的になってしまふ面がある。データを伴ったこうしたアプローチは重要だと思います。

森 私と森井さんの論文は一般的なアメリカ人にとって原爆投下がどう受けとめられているかについて、説得的に書かれていると思います。空軍協会や在米在郷軍人協会といったロビイスト集団がいまだに力を持っていることもよく分かりました。バースタインさんの「フォリンアフェアーズ」の論文が「中央公論」に訳載されていて(検証・原爆投下決定までの三百日)、大統領が実際に原爆を投下する前に、日本から視察団を招き原爆の威力を見せて恫喝

## 原爆展示について

に使ったどうか考えたことなど、初めて知ることが多かった。バースタインさん自身は原爆が戦争終結を早めたとの考え方には懐疑的です。

中西 冷戦に関する拘束が解けたいま、第二次大戦がアメリカ人にとって善くて善き戦争であったという認識を維持しなければならぬという現代のアメリカ人の強迫的な意識が、この問題の背景にある。逆に言う、私たちが側にもそういう問題があると思う。入江昭さんの「日本とアジア百年の重女」(世界)がふれてるアジアに対する問題もそうだが、ここ十年くらいの間に日本人はなぜ日米戦争についてだけこれほどの免責意識を持ってしまったのでしょうか。

橋川 国が違えば、同じ出来事がメタルの両面のように異なったものとして記憶され、人々の常識になることは必ずあります。真珠湾攻撃や原爆投下についても、このギャップが存在することをよく理解することが出発点だと思う。これまでの国内言論は原爆がどんなに悲惨だったかを日本国内の文脈で繰り返して反復することしかやってこなかった。ギャップは埋まるどころか、これでは原爆の悲惨さを訴えようとする人々が目指しているはずの目的すら達成できない。原爆が日本人にとってどうしてそうした「神聖な記憶」になったのかは究明を要する問題です。出来事自体の悲惨さは当事者には自明のことですが、これを国境を越えて伝達することは非常にむずかしい。

森 アジアの国々は戦争中の日本の行為を忘れないでいる。一方、東京大空襲にしても原爆にしても、戦後、日本がそういうかたちではアメリカに対して「悪意」を持たなかったことが不思議です。侵略国日本と占領国アメリカの違いなどもあります。

中西 原爆についてはともかく太平洋戦争については、アメリカにもアジアの国々にもそれが日本の侵略によって始まったもので、一九四五年八月十五日まで一つの物語であるというところを方にはかなりコンセンサスはある。それを理解せずに簡単に脱冷戦構造の中で日米戦争について免責意識を持つ昨今の議論は、日本の将来を考

道徳には道徳の合理性があり、それを本来的な意味で踏み越えなければ反道徳を気取っても意味がない。オーソドックスを歩むというトレーニング、思想が編集者に欠けていた。

その対極にあるのが「ニューズウィーク日本版」(1/25)の「アウシュビッツ特集」です。新しくわかった数字にこだわり、新しく証言を取材して書いている。どちらが歴史の評価に耐えるかはどうでもよい。でも我々の多くが「ニューズウィーク」のような記事を読まなければ「マルコポーロ」のような編集者はいくらでも生まれるでしょう。

森 粕谷一希さんが読売新聞(2/9夕刊)に寄稿した「忘れられたメディアの初心で」学問に対する尊敬の欠如を指摘しておられます。文藝春秋の筆者にはこの問題に詳しい研究者が何人もいるのになぜ相談しなかったのか。私たちの小さな雑誌では、間違いがあれば必ず訂正してしまいます。雑誌がなくなれば終わりのなりの二つの雑誌をすべて大事にしていきます。ためならぶとして別のを出せばいいと、うんざりしてはな

えど私は向こう見ずではないかと思えます。

橋川 やるべきことをやらないというところが多過ぎる。一つは今度の被爆者援護法。本島さんと平岡敏さんの対談(被爆五十年を迎えて「世界」でも指摘されています)ですが、対象が日本人に限られている。戦争の当事者でもあった日本人と、日本政府の行政命令で無理やり連れてこられた朝鮮半島の人々や外国人の捕虜とでは、被害の補償や責任のあり方は全然違うはず。仮に当事者の日本人に補償しないことがあり得ても、外国人に補償しないなんてあり得ないはず。発想が反対なんです。もう一つは、真珠湾奇襲に際して通知が遅れたのが外務省の責任であることが外交文書の公表ではっきりしました。大日本帝国の正統な後継政府である日本政府がこの責任を引き受けるのなら、謝罪があつてしかるべきなのに、何もない。日本人は忘れっぽいけれど、世界の人はだれも忘れていない。これはバースタインさんも指摘しています。

中西 欧米においては大変重いテーマですが、特にアウシュビッツ50周年に合わせて掲載するというのは、ものすごく大きな挑戦です。そのリスクがわからなかったのであれば、倫理の問題であることもに教養の問題です。

橋川 そういったトレーニングも積んでいない人が、いい企画を連絡したという理由で看板編集長になっていく。そういう日本の編集者の養成システムが問題です。

中西 田中金脈をやったように文春ジャーナリズムの姿勢は、大勢順応、同調性の傾向が強い日本では貴重なものです。ただし、今回はそれが最も悪い形で出ましたね。

橋川 最近の文春は刺すべき敵を誤っています。皇室、JRR、アウシュビッツ、全然刺さなくてもいいところを刺している。弱い者いじめになっていきます。

森 タブーに果敢に挑戦する姿勢は大事だと思いますが、それが粕谷さんが言うように手法としてノックアウトリズムだけが目立ってしまった。読者をなめていたのではないのでしょうか。

今回は新進党結成や社会党の分裂騒ぎと動きが急になってきた政党再編成についての評論文を中心に話し合っていたと思います。雑誌がどのように論じているか、何が足りないか、まで踏み込んでおろすと、たぐさんの文章に目を通していただきました。

委員の方から「食傷気味」という発言が出たのは、「論」の入る余地のない政界話が多数を占めていたからですが、「改革」の風が吹いていた細川政権誕生前後と比べて大きく様変わりしています。当時は「改革」の内容をめぐって「論」が闘わされていたはず。いい意味で論者の情熱を感じさせる議論も多かったのですが、今ではその熱も冷めてしまったような今月の雑誌でした。

現実政治への失望もあるかもしれませんが、揺れ動く過渡期である今こそ「論」の復活を期待したいと思えます。

(雅)

大災害の場合、的確な情報を得られるかどうかが大問題ですが、特に指導的立場の人にとっては決定的です。今月のさまざまな記事からは首相公邸、官邸はじめ、中央、地方のトップ周辺の情報環境のお粗末さがよくわかりました。

マルチメディア時代が叫ばれ、パソコンや学生が携帯電話やパソコン通信などを利用しているのが現代日本の情報空間ですが、皮肉なことに政治行政のトップ周辺にはまだ届いていないようです。山根一真さんが指摘された日米格差もあるのでしょうか、ます国内の「一民」の格差を急いで是正する必要があります。

なお、この欄がスタートした一昨年七月以来参加していただいた森まゆみさんは今回が最後になり、次回から女性史研究家の山下悦子さんに交代します。(雅)

後書き

後書き



1995-7-18

# 高齢化社会の結婚観

## 年上女性 / 年下男性

山下 横綱貴乃花関が八歳年上の河野賢子さんと婚約し、テレビの人気ニュースキャスターの小宮悦子さんの結婚相手も九歳年下だったことで、女性週刊誌などに「年上の女性/年下の男性」というテーマの記事がたくさん出ています。統計的にも十五年前の一一・七％が一九九三年に一六・一％と「年上妻」は確実に増加しています。戦前の女性解放の旗手平塚らいてうは大正時代に年下の男性と一緒にシャワーリズムを歌い、結婚したし、女性史研究家の高群逸枝もパートナーより年上でした。その時代に新しい生き方をした人が、そういう選択をしている。それが大衆化したということでしょうか、週刊誌の取り上げ方も肯定的です。小宮さんは、知名度も経済力もあって年齢にあまり関係ないかたちで華やかに活躍している。昔の男のようにそのうらやまにひき目を感ぜないで、むしろ価値を見いだすのは比較的若い世代の男性なのかなという気がします。

中西 私の中近東やギリシャの男性の友人はだいたい四十代半ばくらいで二十代前半の女性と結婚しています。世界的にも年上の女性との結婚がトレンドになっているところは多い。日本では、近代社会になってから移住者としての男性・家を守る女性という明治型男尊女卑の中で年上の男性と年下の女性の結婚が規範力のあるモデルになったと思う。それでも日本には年上女性との結婚についてのタブー意識が比較的少なかった。それに加えて一九六〇年代以降に育った男性は、日本の近代化によって男性性の重しが増え、年下で将来は未知数の男性の結婚があるにはあると思う。

山下 男性たるもの妻子を養うべきだ、といった意識から自由になったということですね。

橋爪 各週刊誌などを見ると、小宮さんがやはり話題の中心ですね。戦後、結婚は本人同士の間でできるものになったけれど、男女の経済力の違いなどが微妙に反映して、当事者が合意してみたら男性が数歳年上というパターンが多かった。小宮さんのように年上の能力のある女性と年下で将来は未知数の男性の結婚があるにはあると思う。

でも、一つのパターンとして「年上妻」も定着してきているように見えます。これは、特に関心を持って女性の結婚年齢が上がるので年下の男性を対象にするケースも当然増えてくる。しかもそれがうまくいって、年下で発見されたわけですね。それに、女性の方が長生きするので、女性が年下だと夫が死んだあと十年も二十年も一人で生きていかなければならない。それを避けようと思えば、女性の方が年上になる方がいい。こういうこともあって、年上の女性と年下の男性の結婚が一つのパターンとして認知されてきた。

中西 「女性自身」(3/21)によると「年上妻」の傾向はアメリカでも強くなっているそうです。「夫は妻より数歳上」がいいカップリングだという意識は、戦後進んだ大衆化と核家族化に関係しているように思う。

他人指向性の強い大衆社会の中で核家族が強いモデル性を持った。その傾向が行き着くところまで行かないで、後に流れが変わってきたのが七〇年代の末から八〇年代のアメリカ。その一つの方向は家族の崩壊だったかもしれない。同じ流れ

の中で「年上妻」も定着してきたのではないのでしょうか。この脱戦後的で他人指向性が弱まった、新しい大衆社会性が日本にも出てきている気がします。

山下 夫は会社勤めで妻は専業主婦かパートという今までの性別役割分業を土台にした結婚ならしなくともいいと考えている女性はいくつ多いと思う。こういう価値観の変化についていけるのは下の世代の男性なんですね。

橋爪 「日経ウーマン」の「結婚の『価値』は変わったか？」に載っている結婚相談会社アルトマンの調査では、大多数の男性は相変わらず自分より若い女性を伴侶に望んでいる。こういう現実がある以上、今の日本社会では女性が年下の男性の出現を待つのはリスクが伴うわけですね。

中西 この話題ではどの週刊誌も、女性と男性の平均寿命の差がこれだけ開いているから、これだけ年下の男性がいいという点にぶれている。「共に白髪」という古い結婚観と相手をたぐることを考えた高齢化社会に向けた結婚観が、見事にないまじりになっていくのが印象的でした。

「震災後の私たちは「震災前」とは確実に違った思考をしているに違いありません。たまたま冷戦が終わり、戦後五十年を迎えた日本は、政治経済社会の過渡期にある時、大震災の直撃に遭遇しました。メディアを通じて濃密に伝えられた大震災が日本人の意識にどういった影響を与えたのだろうか。そんな思いから、「震災後」をテーマに話していただきました。

最も話題になったのは橋本治さんの文章でした。強力な機動的な国家の必要性を説き、土地私権制限を主張するという、大胆な主張です。いわゆる「戦後民主主義」の良質な部分を代表していた橋本さんが、そんな主張をするところに、大震災の精神的影響の大きさを思いいます。

なお、今月から山下悦子さんが登場しました。「高群逸枝論」「マイケル・ハンク族」などの著書がある、新世代の「女性学」の旗手の一人です。(雅)

### 後書き

「震災後の私たちは「震災前」とは確実に違った思考をしているに違いありません。たまたま冷戦が終わり、戦後五十年を迎えた日本は、政治経済社会の過渡期にある時、大震災の直撃に遭遇しました。メディアを通じて濃密に伝えられた大震災が日本人の意識にどういった影響を与えたのだろうか。そんな思いから、「震災後」をテーマに話していただきました。

最も話題になったのは橋本治さんの文章でした。強力な機動的な国家の必要性を説き、土地私権制限を主張するという、大胆な主張です。いわゆる「戦後民主主義」の良質な部分を代表していた橋本さんが、そんな主張をするところに、大震災の精神的影響の大きさを思いいます。

なお、今月から山下悦子さんが登場しました。「高群逸枝論」「マイケル・ハンク族」などの著書がある、新世代の「女性学」の旗手の一人です。(雅)

# 既成の枠組み再考を

## 「円高への視点

中西 円高が議論になっていますが、通貨当局の公式発言は別にしてドル安・円高傾向は長期にわたって続くと見方が共通しています。水谷研治さん(「あえて円高を歓迎する」文藝春秋ほか)、高橋聖宣さん(「特集・マネー暴走」エコノミスト4/18)、長谷川慶太郎さん(「ドル危機の本質」Voice)など、いずれもそういう見通しを語っている。また、円高という輸出企業を中心に「大変だ」と悲鳴をあげる議論が多かったのですが、今回はこの種の議論が少なくなった。

山下 「Voice」の水谷研治さんとの対談(強い円)もまた、(楽)の渡部昇一さんの発言が面白かった。円高という女性の就職難など暗い要素ばかり思いつかしますが、メリットを考えることも重要かもしれません。渡部さんは水谷さんの「ドルが安すぎる」という意見は政策当局と経済人の声」という発言を引き出して、生活実感的な意見を水谷さんにぶつけています。

橋爪 今回の円高のメカニズムを「Voice」の長谷川さんの論文がかなり

手際よくまとめています。円高がこれだけ高くなるので自動車などの輸出は確かに減る。しかし、日本が独自の供給している企業向けの製品、例えば自動車エンジン、パソコンの線材や電子機器の液晶などは、たとえ価格がいくら上がっても海外の企業は日本から買わざるを得ない。そうすると円高になると自動的に貿易黒字が増え、またさらに円高が進行する。為替の変動によっても貿易黒字が修正されるに、状況もあるのです。ほかの国の製品と価格競争しなければならぬ分野の企業は急速に国際化を迫られる一方で、高付加価値の製品を持つ企業は日本に残っていい。そういう産業構造の変化が急速に起きている見取り図が描かれています。

伊藤元重さんの「バブル円高解消のシナリオ」(中央公論)は、今回の円高は経済の実態を反映していないバブルだとして、原因は貿易黒字の蓄積よりの海外投資の密着込みにあると見ます。そして、将来の円安を見越してしまつた資産を買っておこなう企業の利益になるし、円高の解消にもなるという見方です。政府には全く期待できな(Transparens)。

でも、一つのパターンとして「年上妻」も定着してきているように見えます。これは、特に関心を持って女性の結婚年齢が上がるので年下の男性を対象にするケースも当然増えてくる。しかもそれがうまくいって、年下で発見されたわけですね。それに、女性の方が長生きするので、女性が年下だと夫が死んだあと十年も二十年も一人で生きていかなければならない。それを避けようと思えば、女性の方が年上になる方がいい。こういうこともあって、年上の女性と年下の男性の結婚が一つのパターンとして認知されてきた。

中西 「女性自身」(3/21)によると「年上妻」の傾向はアメリカでも強くなっているそうです。「夫は妻より数歳上」がいいカップリングだという意識は、戦後進んだ大衆化と核家族化に関係しているように思う。

他人指向性の強い大衆社会の中で核家族が強いモデル性を持った。その傾向が行き着くところまで行かないで、後に流れが変わってきたのが七〇年代の末から八〇年代のアメリカ。その一つの方向は家族の崩壊だったかもしれない。同じ流れ

の中で「年上妻」も定着してきたのではないのでしょうか。この脱戦後的で他人指向性が弱まった、新しい大衆社会性が日本にも出てきている気がします。

山下 夫は会社勤めで妻は専業主婦かパートという今までの性別役割分業を土台にした結婚ならしなくともいいと考えている女性はいくつ多いと思う。こういう価値観の変化についていけるのは下の世代の男性なんですね。

橋爪 「日経ウーマン」の「結婚の『価値』は変わったか？」に載っている結婚相談会社アルトマンの調査では、大多数の男性は相変わらず自分より若い女性を伴侶に望んでいる。こういう現実がある以上、今の日本社会では女性が年下の男性の出現を待つのはリスクが伴うわけですね。

中西 この話題ではどの週刊誌も、女性と男性の平均寿命の差がこれだけ開いているから、これだけ年下の男性がいいという点にぶれている。「共に白髪」という古い結婚観と相手をたぐることを考えた高齢化社会に向けた結婚観が、見事にないまじりになっていくのが印象的でした。

### 後書き

「震災後の私たちは「震災前」とは確実に違った思考をしているに違いありません。たまたま冷戦が終わり、戦後五十年を迎えた日本は、政治経済社会の過渡期にある時、大震災の直撃に遭遇しました。メディアを通じて濃密に伝えられた大震災が日本人の意識にどういった影響を与えたのだろうか。そんな思いから、「震災後」をテーマに話していただきました。

最も話題になったのは橋本治さんの文章でした。強力な機動的な国家の必要性を説き、土地私権制限を主張するという、大胆な主張です。いわゆる「戦後民主主義」の良質な部分を代表していた橋本さんが、そんな主張をするところに、大震災の精神的影響の大きさを思いいます。

なお、今月から山下悦子さんが登場しました。「高群逸枝論」「マイケル・ハンク族」などの著書がある、新世代の「女性学」の旗手の一人です。(雅)

円高が議論になっていますが、通貨当局の公式発言は別にしてドル安・円高傾向は長期にわたって続くと見方が共通しています。水谷研治さん(「あえて円高を歓迎する」文藝春秋ほか)、高橋聖宣さん(「特集・マネー暴走」エコノミスト4/18)、長谷川慶太郎さん(「ドル危機の本質」Voice)など、いずれもそういう見通しを語っている。また、円高という輸出企業を中心に「大変だ」と悲鳴をあげる議論が多かったのですが、今回はこの種の議論が少なくなった。

山下 「Voice」の水谷研治さんとの対談(強い円)もまた、(楽)の渡部昇一さんの発言が面白かった。円高という女性の就職難など暗い要素ばかり思いつかしますが、メリットを考えることも重要かもしれません。渡部さんは水谷さんの「ドルが安すぎる」という意見は政策当局と経済人の声」という発言を引き出して、生活実感的な意見を水谷さんにぶつけています。

橋爪 今回の円高のメカニズムを「Voice」の長谷川さんの論文がかなり

手際よくまとめています。円高がこれだけ高くなるので自動車などの輸出は確かに減る。しかし、日本が独自の供給している企業向けの製品、例えば自動車エンジン、パソコンの線材や電子機器の液晶などは、たとえ価格がいくら上がっても海外の企業は日本から買わざるを得ない。そうすると円高になると自動的に貿易黒字が増え、またさらに円高が進行する。為替の変動によっても貿易黒字が修正されるに、状況もあるのです。ほかの国の製品と価格競争しなければならぬ分野の企業は急速に国際化を迫られる一方で、高付加価値の製品を持つ企業は日本に残っていい。そういう産業構造の変化が急速に起きている見取り図が描かれています。

伊藤元重さんの「バブル円高解消のシナリオ」(中央公論)は、今回の円高は経済の実態を反映していないバブルだとして、原因は貿易黒字の蓄積よりの海外投資の密着込みにあると見ます。そして、将来の円安を見越してしまつた資産を買っておこなう企業の利益になるし、円高の解消にもなるという見方です。政府には全く期待できな(Transparens)。

でも、一つのパターンとして「年上妻」も定着してきているように見えます。これは、特に関心を持って女性の結婚年齢が上がるので年下の男性を対象にするケースも当然増えてくる。しかもそれがうまくいって、年下で発見されたわけですね。それに、女性の方が長生きするので、女性が年下だと夫が死んだあと十年も二十年も一人で生きていかなければならない。それを避けようと思えば、女性の方が年上になる方がいい。こういうこともあって、年上の女性と年下の男性の結婚が一つのパターンとして認知されてきた。

中西 「女性自身」(3/21)によると「年上妻」の傾向はアメリカでも強くなっているそうです。「夫は妻より数歳上」がいいカップリングだという意識は、戦後進んだ大衆化と核家族化に関係しているように思う。

他人指向性の強い大衆社会の中で核家族が強いモデル性を持った。その傾向が行き着くところまで行かないで、後に流れが変わってきたのが七〇年代の末から八〇年代のアメリカ。その一つの方向は家族の崩壊だったかもしれない。同じ流れ

の中で「年上妻」も定着してきたのではないのでしょうか。この脱戦後的で他人指向性が弱まった、新しい大衆社会性が日本にも出てきている気がします。

山下 夫は会社勤めで妻は専業主婦かパートという今までの性別役割分業を土台にした結婚ならしなくともいいと考えている女性はいくつ多いと思う。こういう価値観の変化についていけるのは下の世代の男性なんですね。

橋爪 「日経ウーマン」の「結婚の『価値』は変わったか？」に載っている結婚相談会社アルトマンの調査では、大多数の男性は相変わらず自分より若い女性を伴侶に望んでいる。こういう現実がある以上、今の日本社会では女性が年下の男性の出現を待つのはリスクが伴うわけですね。

中西 この話題ではどの週刊誌も、女性と男性の平均寿命の差がこれだけ開いているから、これだけ年下の男性がいいという点にぶれている。「共に白髪」という古い結婚観と相手をたぐることを考えた高齢化社会に向けた結婚観が、見事にないまじりになっていくのが印象的でした。



# 無党派層と政治

中西 都知事に青島幸男さん、大阪府知事に横山ノックさんが当選して政治における無党派層の問題が論議されています。国政レベルの政治改革の議論と関連づけたいものが多いのですが、政治改革を今後どう進めるかにつなげた議論は少ない。無党派層自体を九〇年代政治の新しい波だとするとどうなるか、つかみにくい。無党派層を顕念化、理想化した、危険視したりして、無党派層を過大に考えている気がします。分りやすい解説としては、岩見隆夫さんの「青島・横山ブームの背景」(中央公論)があります。「諸君」では石原慎太郎さんが青島さんにエールを送っている(青島幸男君、国と闘え)。ちょっと意外な結びつきですが、今後の政治の動向を考える時に、こんなところヒントがあるのかなという気がします。

生むことを危惧している。すが私はそうは思いません。石原さんは「正論」でも青島新都知事への期待と助言を語っています(私も期待する青島新都知事への助言)。一向に改革が進まない政治への絶望が一方であったうえで、官僚出身の石原信雄さんではなく、さらに大前研一さんでも岩國哲人さんでもなく、自前の表現力のある青島さんのキャラクターに期待すると言って、具体的な助言をしていて、好感が持てました。

中西 佐伯さんや西部さんの言う無党派層は本来の政治ではない、政党は政治にとって本質的なチャンネルだという議論は私も賛成です。ただ「青島さんはいじやない」といったおまじい拒否、お祭り感覚に結び付いた人格的な共感性なしに日本の政治が成り立つのか気になります。日本ではあれかこれかを一つのロジックで選ぶとか、機能的な政策論議に取れんせずに、むしろ政策論を向かうさんさんいものを感じる文化の土壌がある。無党派層の問題は「政治じゃないよ」と突き放して済まされるものではないと思います。

中西 佐伯さんや西部さんの言う無党派層は本来の政治ではない、政党は政治にとって本質的なチャンネルだという議論は私も賛成です。ただ「青島さんはいじやない」といったおまじい拒否、お祭り感覚に結び付いた人格的な共感性なしに日本の政治が成り立つのか気になります。日本ではあれかこれかを一つのロジックで選ぶとか、機能的な政策論議に取れんせずに、むしろ政策論を向かうさんさんいものを感じる文化の土壌がある。無党派層の問題は「政治じゃないよ」と突き放して済まされるものではないと思います。

## 後書き

オウム真理教をめぐる事態は二重の意味で日本社会の「鏡」になっているように思う。まずこの事態そのものが日本人や社会を映し出しているという意味で。次にこの事態への反応の仕方が日本人や社会を映し出しているという意味で。この欄との関係で言えば、事態の解釈や対応策の論議の仕方、その質・量も含めて日本の「いま」を映し出していると言えます。総合誌のほとんどがオウム問題の特集をしています。が、中西輝政さんの指摘のように、文化的宗教的解釈論が多々、対策論や制度論が少なかったことが特徴です。私たちがまずこの事態を理解することに全力をあげているということなので、私が、私たちが自身でこの社会を築いていくという意識が弱いことを映し出しているのかもしれない。(雅)

# 「過渡期」の存在として

中西 都知事に青島幸男さん、大阪府知事に横山ノックさんが当選して政治における無党派層の問題が論議されています。国政レベルの政治改革の議論と関連づけたいものが多いのですが、政治改革を今後どう進めるかにつなげた議論は少ない。無党派層自体を九〇年代政治の新しい波だとするとどうなるか、つかみにくい。無党派層を顕念化、理想化した、危険視したりして、無党派層を過大に考えている気がします。分りやすい解説としては、岩見隆夫さんの「青島・横山ブームの背景」(中央公論)があります。「諸君」では石原慎太郎さんが青島さんにエールを送っている(青島幸男君、国と闘え)。ちょっと意外な結びつきですが、今後の政治の動向を考える時に、こんなところヒントがあるのかなという気がします。

生むことを危惧している。すが私はそうは思いません。石原さんは「正論」でも青島新都知事への期待と助言を語っています(私も期待する青島新都知事への助言)。一向に改革が進まない政治への絶望が一方であったうえで、官僚出身の石原信雄さんではなく、さらに大前研一さんでも岩國哲人さんでもなく、自前の表現力のある青島さんのキャラクターに期待すると言って、具体的な助言をしていて、好感が持てました。

中西 佐伯さんや西部さんの言う無党派層は本来の政治ではない、政党は政治にとって本質的なチャンネルだという議論は私も賛成です。ただ「青島さんはいじやない」といったおまじい拒否、お祭り感覚に結び付いた人格的な共感性なしに日本の政治が成り立つのか気になります。日本ではあれかこれかを一つのロジックで選ぶとか、機能的な政策論議に取れんせずに、むしろ政策論を向かうさんさんいものを感じる文化の土壌がある。無党派層の問題は「政治じゃないよ」と突き放して済まされるものではないと思います。

中西 佐伯さんや西部さんの言う無党派層は本来の政治ではない、政党は政治にとって本質的なチャンネルだという議論は私も賛成です。ただ「青島さんはいじやない」といったおまじい拒否、お祭り感覚に結び付いた人格的な共感性なしに日本の政治が成り立つのか気になります。日本ではあれかこれかを一つのロジックで選ぶとか、機能的な政策論議に取れんせずに、むしろ政策論を向かうさんさんいものを感じる文化の土壌がある。無党派層の問題は「政治じゃないよ」と突き放して済まされるものではないと思います。

# 「オウム」と現代

# 科学者、警察、メディア

橋爪 オウム真理教事件について独自の観点から読み込んだ論文がいくつもありました。「中央公論」の米本昌平さん「再建せよ! 科学者の社会的責任を」は、科学者としての知的共同体が日本ではそもそも機能していなかったと指摘しています。オウム事件はその点に大きな警告を発したものだというスタンスで、共感を覚えました。「諸君」の野田直雄さんの「オウムと『宗教の復興』」は、カルトを批判する場合に不可欠な正統な宗教が、そもそも日本にはなかった点が問題だとしています。オウム事件に衝撃を受けるだけではなく、正統的宗教がないのだからそれを代わる「骨太い保守主義の精神」を根本にすべきだという提言で、これも共感を持って読みました。吉見俊哉さんの「われわれ自身の中のオウム」(世界)は、今回の事件はメディアの中でメディアと結びついた関係を作ったこと、といった指摘で、教えられるところが多かった。

中西 「諸君」の加地伸行さんの「宗教教育が『怪力・乱神』を防ぐ」が、儒教の観点から戦後日本における宗教教育の欠如を問題にしています。野田さんの「骨太い保守主義」の内容も冷戦後の今日、分かったくくになっており、その点では加地さんの日本的、儒教的な発想の重要性を説く議論の方が分かりやすい。田中良太さんの「空洞化を露呈した警察機構」(中央公論)は、松本サリン事件以後、地下鉄サリン事件までの間に有効な手が打てなかった「係長的発想」の現代警察の問題点を指摘しています。「諸君」の生田忠孝さんの「警察はオウムに勝ったか」も少し別の角度ですが、官僚機構としての警察を問題にしています。文藝春秋の「ドキュメント・誰も書かなかった公安警察」(浜口敏之&取材班)はドキュメントとしては面白く読みました。

米本さんの論文なども合わせて考えると、オウム問題は戦後の日本、さらに近代日本にとっての大きな宿題を突き付けたものと思えます。つまり理科系の科学者が思想的・哲学的面を欠いたまま近代化政策に奉仕するだけの存在だ

た点、宗教教育の欠如、社会の安全にかかわる大きな組織犯罪への対応ができない、法制度の不備といった問題が浮き上がりまじった。山下「Ronza」の辺見庸さんの連載対談や「週刊金曜日」(6/2)に松本サリン事件で犯人扱いされた河野義行さんが登場して「インタビュー」に答えています。「お前が犯人だろう」と言いたいやらせ電話が事件当初の二カ月間に百件もあったそうです。一度犯人扱いされてしまうと、今の日本のメディアのあり方の中で「犯人ではない」と証明することが不可能に近いものになってしまつ。情報が飛びかう現代社会の負の部分突き付けられるものとして読みました。犯人づくりに加担してしまつ、虚構のレッテル張りを取り上げたものが、よつや出て来た感じですが、「週刊金曜日」(6/9)では、神保哲生さんの「オウム報道に情報操作はなかったか」を露呈した情報非公開社会・日本の危険性」も警察のリスク情報にすぎるとのメディアのあり方を問題にしています。

高台真司さんはオウムに引かれる若い層と同じ世代の学者ですが、「良心」の犯罪者、オウム完全克服マニュアル(宝島30)で「オウム」がある「エリート」がなぜ「オウム」だか「オウム」だかという逆転させたかたちで細かく分析しています。世代的にはかの論文より対象をよく理解できているのかなという気がします。中西 先月も指摘しましたが、今月になってこの事件を反社会的集団に対する治安の問題、社会に対する脅威に取り組み制度的な問題として論じたものが出てきていない。この点は少し残念に思いました。橋爪 今回の事件は、人々の自由を保障するはずの制度が、ある条件のもとでは全く逆に作用してしまつたことを明らかにしたと思えます。社会の中で断絶に発生するそうした病理現象についての想像力を欠くなら大きなしっぺ返しに来ることを示した点で、今回の事件の特徴だったのではないのでしょうか。小さな兆候から正しい推論によって来るべき危険を適切に取り除いていく、そんな制度の構築が今後の課題だと思います。

## 後書き

「日米安保」というテーマは一九六〇年の安保闘争などを知る人にとって懐かしい響きがあるはずですが、最近の「経済対立と日米同盟」という問題設定は隔世の感があるでしょう。榮綱、悲観と温度差はありますが、今月の各誌とも日米同盟を維持するために、その「危機」をどう回避するかで軌を一にしているのですから。かつての反安保の主張や運動の背景には、「軍事」と「同盟」を忌避する理想主義的な平和主義、反米ナショナリズム的な心情、連・中国など社会主義圏への親近感など様々な心情と理念がありました。しかし、冷戦末期までにはすっかり景色が変化し、「安保」も主要な争点としての地位を失って久しかったのです。その忘れられたテーマが日米摩擦を機に再浮上したわけですが、イデオロギーを離れ、日本の国や国民の利益、世界の安定などの観点からの議論が主流を占めるようになった所に、「国内冷戦」が終わった効用を感じます。(雅)



文化 批評と表現

実現するか二大政党制

橋川 参院選の総括では二つの対照的な見方がありました。佐々木毅さんの「『民主主義』の政治は終わった」(THEIS 読者)は、新しい変化はあまのなかつたといふ、五百旗頭さんの「日本政治に新しい潮流を見た」(潮)は、二大政党制を国民が選び取るという明確な潮流が見られるという。私は五百旗頭さんの分析に共感する部分が多かった。参院選と言え、自民党対新進党という対立の間に社会党が埋もれていくという流れがあり、第三勢力を国民は支持しようとしていないという分析です。

中西 村山首相や社会党政権を間近に見ている山口二郎さんの「社会党は解散しリーダーは引退せよ」(Ronza)が面白かったのですが、政策研究会などで社会党の活力のよみがえりを訴えてきたにもかかわらず、一向に自覚のない、とこのことです。四・五二％と投票率が大幅低かったわけですが、佐々木さんは無党派層が大変に弱く、日本政治の主人公という気力に非常に乏しいと指摘している。また、仮に投票率が六〇％になったときに、むしろ恐ろしいことが起こる

安がヘースになって大津波が起きたら恐ろしいというのですが、これは鋭い指摘だと思えます。山下 五百旗頭さんの論文を読んで象徴的な議論だ。吉本隆明さんは井沢俊介さんによる「日本政治」(諸君)で、青島ノックを選んだ選択は「無意識のうち」に『死』の方向からいまの社会を見てきたと書いていました。「老境」に入った日本社会を無意識に反映しており、無意味な感じがあるということですね。私は投票率が低いことも深刻に受け止めた方がいいと思うし、有権者としての意思表示を放棄してしまうのも問題だと思えます。青島さんやノックさんが出たころにはまだ無党派層の意思表示があったのかなと思つたんですが、今はもう少し深刻に受け止めた方がいいという気がしました。その点では悲観的な佐々木さんの論文の方が、私の感じに近い。中西 吉本さんは無党派層について興味深い分析をしています。「市民主義」と「市民の本音」との違いを分かつた無党派層現象を考へてはいいかなという点。次に「小沢一郎時代」というのもいいですね。

週刊誌の記事では、野茂の活躍には捕手のピアザの存在が大きいといふことが書かれていたのが印象的でした(サンデー毎日7/23ほか)。私の経験でも、こういう国境を超えた人間のつながりは外国で仕事をするときには大変重要です。もちろん個人としてちゃんと行動できたり、ネアカであるという野茂自身の性格も大きいでしょうが、逆になんか感じたなと思ったのは、あの「底辺鉄」の「人を見る目」(週刊読者7/20)。こういうところに視線を向けると、日本の古いムラ意識が感じられるに取材をするというところだ、と思います。山下 野茂が最初に大リーグにいったときには「スト破り」だと言われたり、また近鉄サイドからの批判もあったと記憶しています。そういうコンプレックスの中の活躍は立派です。野茂は清原や桑田のように高校時代から甲子園で活躍した「野球界のエリート」と言われて、選手で、反骨精神もあったと思う。ドジャースは監督がイタリア人ですが、いろいろな国籍の人がいるというチーム環境も良かったのではないかと。

とが大切だ。五百旗頭さんは、労働組合は保守対立時代には革新支持だったが、産業構造が変わって労働者が政治を支援しなくなるのは各党のせいという考えをいっています。橋川 それは政治の本能からすればよいのです。その弊害を少なくするために、国民の意思が直接政権の選択に結び付く小選挙区制で二大政党制を機能させようとしています。中西 今は経済界も含めて責任をとりたくない指導者が多すぎたので、山下さんの心配も分かります。政治は最後は人間たことごとを忘れてはいけませんね。

参院選と村山政権

橋川 野球はアメリカンフットボール、バスケットとともにアメリカを代表するスポーツです。日本はそれを受け継いだわけですが、力の差は大きいとされてきた。選手間の交流も日本からアメリカに行くことはなく、嫌み分けができていた。野茂の衝撃はこれを打ち破った。トルネード投法は体格以上の力を発揮する努力の結果(ジョージ・フォー)も彼にしか投げられな

種類のもの。その意味で優れた才能があった。私だけなら仮に少々才能があってもそれを試した大リーグに行くことはちょっと躊躇する。過去の選手もそうだった。ところが、野茂は大リーグ行きを選んだ。アメリカはもと世界の中から人材を集めて成り立っている国家だったけれど、日本だけは一流の人材を送ってアメリカ文化に貢献する発想がなかった。そこに野茂のような人物が出てきたことでアメリカ側にもある種の安堵感があるんじゃないでしょうか。中西 文藝春秋の野茂と江夏との対談(君には大リーグがよく似合う)が面白かった。江夏も大リーグに挑戦した。私は江夏とほぼ同世代というところもあって、彼には対米コンプレックスがあったらうと身がこまされて感じます。野茂世代はやはり私たちの世代とは違う日米関係のイメージを持っていて、新しい感覚で世界の中で活躍している。さやややチャン・ルン・テンの全英二語がありましたが、男子の松岡のベスト8入りは野茂が大リーグで活躍するのと同じくらいに私には驚きでした。日本という国が変わりつつあると痛感しました。

橋川 週刊ポスト(7/21)のインタビューが面白かった。個性について「結果が残れば個性的であって結果が残らなければ個性じゃない」と言っています。自分のスタイルについて結果を含めて彼自身で責任を持っている。これは潔い姿勢です。「ナ・パスにならなかつたですか」という質問に「ナ・パスになるやつは最初からナ・パスに来ませんよ」と答えています。自分がどこに所属するかでは無く、自分はどこにいたなら一番力を発揮できるかを考えている。野球は大リーグが世界の標準です。同じことはビジネスの世界でも学問の世界にもあることだと思います。野茂が、ほかの分野で野茂のように行動できる人はどれくらいいるか。野球はルールが世界共通というところもありません。

中西 確かに日本人が国際社会で活躍する姿として象徴的かもしれません。なるほどという人間ならアメリカの社会で才能を發揮できる人だと思えます。

後書き ニューズウィーク日本版(7/26)のヒロシマ特集が印象的でした。被爆直後の写真に「ああ、我々は……何をしてしまったのか」という大きな見出し。原爆を投下したエンロ・ゲンの副操縦士の日記からの引用で、その道徳的苦悩が特筆の核です。トルーマン大統領の投下決定までを検証した後で「身の毛もよだつ惨禍を引き換えて、この決定はおそらく多くの人命を救った」「世界はトルーマンのおかげで、原爆がいかに恐ろしい兵器かを自のあたりにした。あれ以来、この地球上で二度と核兵器が使われていないのはそのせいなのかもしれない」と締めくくっています。結論には賛成できませんが、米国誌自身の道徳的苦悩が見えるように好感が持てました。一方、聖公会で話題になった「ジュアル誌は対照的でした。ハルマゲドン待望のような「戦争への誘惑」、やたら屈高な「日本だけがなせよ」。中身はタイトルほど過激ではないのですが、その「聖」が気になります。(推)

後書き

後書き

毎月の大小二つのテーマは、月刊誌が出そろった10日ごろに決めています。先月の「戦後五十年」のように、かなり前から予定してあるものもあります。今月の小テーマ「参院選と村山政権」も、実は一カ月前から大テーマで予定していたものでした。しかし、論議の素材になる論文が少ない上、もっと緊急のテーマ「中仏の核実験」が出てきたので、大テーマはこちらに譲りました。

最近、総合誌には政治についての論評が少なくなってしまいました。大震災やオウム事件の陰に隠れて目立たないものもありますが、政治自身の停滞を反映しているのではありません。五五年体制崩壊が叫ばれた二年前の政治論議の迫力、熱気が今のようです。参院選後には論評が出そろったと思うましたが意外に少なく、やはり世の関心が日本政治に向いていないことを改めて確認しました。(推)

文化 批評と表現

日米ともに新鮮な驚き

山下 大リーグでの野茂投手の活躍が話題です。ニューズウィーク(7/12)では野茂は表紙にもなって、子供たちの間でも大変な関心事です。知り合いの日系三世の人は「涙が出るほど」と興奮していました。週刊金曜日(7/14)でロサンゼルス在住の作家・米谷ふみ子さんが「野球嫌いも知る」モ・フィーバーを書いています。三十歳の作家の息子さん「野茂が日本野球界に対するアメリカ人の価値観を変えてしまったら」と言っているそうです。野茂は日本の球界の古い体質と合わずにアメリカにいったわけで、彼の活躍で日米球界のギャップも明らかになった。野茂は上の世代に反抗して自分の夢を実現したラッキーボーイだったという感じがします。

橋川 野球はアメリカンフットボール、バスケットとともにアメリカを代表するスポーツです。日本はそれを受け継いだわけですが、力の差は大きいとされてきた。選手間の交流も日本からアメリカに行くことはなく、嫌み分けができていた。野茂の衝撃はこれを打ち破った。トルネード投法は体格以上の力を発揮する努力の結果(ジョージ・フォー)も彼にしか投げられな

週刊誌の記事では、野茂の活躍には捕手のピアザの存在が大きいといふことが書かれていたのが印象的でした(サンデー毎日7/23ほか)。私の経験でも、こういう国境を超えた人間のつながりは外国で仕事をするときには大変重要です。もちろん個人としてちゃんと行動できたり、ネアカであるという野茂自身の性格も大きいでしょうが、逆になんか感じたなと思ったのは、あの「底辺鉄」の「人を見る目」(週刊読者7/20)。こういうところに視線を向けると、日本の古いムラ意識が感じられるに取材をするというところだ、と思います。山下 野茂が最初に大リーグにいったときには「スト破り」だと言われたり、また近鉄サイドからの批判もあったと記憶しています。そういうコンプレックスの中の活躍は立派です。野茂は清原や桑田のように高校時代から甲子園で活躍した「野球界のエリート」と言われて、選手で、反骨精神もあったと思う。ドジャースは監督がイタリア人ですが、いろいろな国籍の人がいるというチーム環境も良かったのではないかと。

とが大切だ。五百旗頭さんは、労働組合は保守対立時代には革新支持だったが、産業構造が変わって労働者が政治を支援しなくなるのは各党のせいという考えをいっています。橋川 それは政治の本能からすればよいのです。その弊害を少なくするために、国民の意思が直接政権の選択に結び付く小選挙区制で二大政党制を機能させようとしています。中西 今は経済界も含めて責任をとりたくない指導者が多すぎたので、山下さんの心配も分かります。政治は最後は人間たことごとを忘れてはいけませんね。

後書き ニューズウィーク日本版(7/26)のヒロシマ特集が印象的でした。被爆直後の写真に「ああ、我々は……何をしてしまったのか」という大きな見出し。原爆を投下したエンロ・ゲンの副操縦士の日記からの引用で、その道徳的苦悩が特筆の核です。トルーマン大統領の投下決定までを検証した後で「身の毛もよだつ惨禍を引き換えて、この決定はおそらく多くの人命を救った」「世界はトルーマンのおかげで、原爆がいかに恐ろしい兵器かを自のあたりにした。あれ以来、この地球上で二度と核兵器が使われていないのはそのせいなのかもしれない」と締めくくっています。結論には賛成できませんが、米国誌自身の道徳的苦悩が見えるように好感が持てました。一方、聖公会で話題になった「ジュアル誌は対照的でした。ハルマゲドン待望のような「戦争への誘惑」、やたら屈高な「日本だけがなせよ」。中身はタイトルほど過激ではないのですが、その「聖」が気になります。(推)



文化 批評と表現

安保への複雑な感情露呈

山平 沖縄の米兵の小学生暴行事件の背景は「週刊金曜日」10/6(9)の新屋敷教生たちの論文身の危険にさらされ続ける女性たち「4」の「ニューズウィーク」10/4(9)の「ニューズウィーク」の「米兵」を扱った記事は読むと大分分かります。奥底の米軍に対する種々の屈辱感や、男性の女性に対するレイプという問題への「わが国の二重性を背負った事件だ」といえます。今までの沖縄の事情が本土に伝わらず、また日本のマスコミが女性の権利について鈍感だったから、今回の事件が全国規模で取り上げられたとみておられる米側は驚かされる。

米兵の「暴行事件」

最近の思いやりの計算を出て、なお旧安保と似たような地位協定しかしてないのかと頭を悩ませる。湾岸戦争ショックと同じで、戦後日本の負の面を隠したくない。山平 密合恵子さんが「週刊金曜日」10/6(9)の「米兵」の最後の植民地「を引く」、今回の事件を女性・子供という「植民地」への許し難い暴力で表現しています。中西 日米安保の本質をなす「基地」の「合理的な二国間関係」としてのアメリカ側は、切実な感情の問題が生じてしまった。橋川 ます、冷静に対応する必要がある。反米感情の暴発は非常に危険な、オウム教団の中に反米感情がどういった形で蓄積されてきたのかを尋ねたい。地位協定の改定をめぐる議論では、容疑兵士の取り調べ期間中に日本側が身柄拘束せざるを得ない問題とされて...

かねないから。もともと現在の地位協定の背後には、アメリカが日本の司法や捜査を信頼できなかった状況があったわけで、協定改定を求めたのは、その辺もよくわかった議論を聞いておくと必要です。中西 田岡さんは基地外の犯罪には英警察が全権限を認め、英国の場合を紹介しています。日本には安保だた乗のコンプレックスがある。その辺を言いつけていって、日米も今や成熟した民主主義国同士として米英型の関係を求めたい。橋川 「ニューズウィーク」10/6(9)の「米兵」の「米兵」の米安保不要派と必要派の対立が、面白。必要派は日本の安保だた乗のほけからいって、一方必要派は安保をなくしたら日本は武装する、反論をしていす。強いの日本軍備増強を容認するか否かという点、他はよくわかっていて、この辺は、これにたいして日本の反安保論は各種の論議を、リベリスティックでなす。安保がなくなると、米兵が再入国、過剰に擁護してしまふおそれがある。

山平 経済成長が続く、国民の権利意識が向上して、今のアジアの変容をアメリカはちゃんと感じ取っている。だから「ニューズウィーク」の記事は、今回の事件がコンプレックスとか反米感情とかいう問題ではなく、当然の権利意識がめばれた人間が当然の要求をしているのだとさえいえる。それを感情的に利用して改定を押し出すような政治家は困る。その点「ニューズウィーク」が「米兵はマナー講座を真剣に受けた方がよかろう」という現実的ではあります。中西 制度疲労の問題があり、三十年前と比べると変わっている。日本政府の対米対応は戦後のな情性ばかりか、その問題をすつと持ち越したままです。国家には戦略的かつ、人間個人の感性からかけはなれた動機にそった世界があります。しかし、ローバル・グローバルな感覚をもった現代の大衆に、安保とか戦略とか問題とかいうのは除外された論理と映る。そのギャップをどう埋めるか、難しい問題です。

後書き 米兵による少女暴行事件について、今月号の各誌は間に合っていない感じが、事態が急展開しているのでもうサブテマで取り上げました。日米安保体制については、国民の多くが支持しています。とはいっても、他に現実的な安保政策の選択肢がないという積極的理由は、かなりの数にわたって見られます。沖縄県知事が土地強制使用の代理署名に拒否したことで、大憲法政治問題に発展しました。日米安保が国民全体の利益になるのであれば、なせ沖縄だけ過大な負担をしなければならぬのか、という問いも当然でしょう。中西さんが指摘するように、日本人の日米安保に対する感情は複雑です。すでに一部のメディアからは反米ナショナリズム的な論議が噴出しはじめています。しかし、感情的な議論は逆に問題をこぼし、危険があるのだから、冷静な議論が必要でしょう。来月号の各誌の論議に期待したいと思います。(雅)

教育の危機への視点

「体罰死」を考える

橋川 福岡県飯塚市の近畿大学付属女子高校で女生徒が教師の体罰で死亡した事件があった。これに直接ふれた論文や関連したものを読みました。しかし、雑誌レベルの言論はステレオタイプで、教育の場面で実際に起きていることや教員の日常感覚、生徒が感じている事柄に届いていないのではないかという感触がします。山下 私はどうしても子どもを育てている母親として読んでしまうので客観的ではないかも知れません。宝島30(渥美京子「エイリアン」体罰教師、諏訪哲二)それでも体罰はなくなるなら「(一)と文藝春秋(同誌編集部)体罰教師へ——教子から80通の手紙」(一)が全く立場が違うのが印象的でした。文藝春秋は、本当は素晴らしい教師だったんだということ、教子の手紙を中心に構成してありますが「生徒にも問題があった」「先生の行動は間違っていた」「先生が死んだら死に至らせない」といった死に至らせない教師の暴力を正当化する内容を掲載するのはいけません。宝島30の渥美さんは割に公正に両方を取材して書いていると思います。ただ「口教師の会」の諏訪さんが男子高校生とちがって女子だ

と反撃される心配がないと言っているのは驚きです。これは教育における女性差別ではないでしょうか。渥美さんが書いていますが、被害者の親に無言電話やイヤスラ電話があることも多いようです。中西 諏訪さんがイギリスのパブリックスクールの例を挙げていて、パブリックスクールでも今はほとんど体罰は禁止ですが、容認されていたときでも、立会人がいてムチとか棒とか決まったもので体罰をした。教師がそこで興奮していたことが法廷で立証されたら、それは私的暴力ということになります。体罰がどうしても必要であるなら、それはどうした「管理された暴力」でなければなりません。諏訪さんが教師も人間だから体罰を加えるときは感情的になる、といっているのは恐ろしいと思う。暴力に対する意識に非常に危険な思い込みがある。マスコミの議論も熱血教師の行き過ぎとか、現代の女子高校生の「乱れた風俗」といった情緒的なレベルでとどまったり、議論をまっせつかえすのではなく、問題解決

法型の社会工学的な議論をしていくべきだと思います。山下 女子高校生がピアスをしたりスカートをはき、短くすることがそんなに許せないことなのでしょうか。中西 この学校が私立学校だとしても大きいでしょう。しつこい厳しい学校という地元での評価の点で学校としての存在にもかかわる。そこには教育という制度、学校そのものが状況に対応できず立ちすくんでしまっている現状があります。その点では西尾幹二さんの「序列と格差の近代を懐疑せよ」(HIS 読売が文部省の存在や教育自由化についてどう考えるか)という点にまで立ち入り論じています。西尾さんは自由化論は教育の危機的状況に対する自己救済の叫びだと表現してしまいが、教育改革を自由化の問題として考えていくだけでは不足に十分でないかと思う。西尾さん自身の筆致にもそれが感じられます。橋川 ジャーナリズムは教育の危機について確固たるスタンスがありませぬ。何か事件が起きると「良心的」なことを言われ、ぼくはなごころをなごころと支配されて、学校の現状を

知らないままに暴力教師だから体罰をしたのだから、と安易なストーリーをこしらえて書いてしまうのが大体のパターンなのです。事件の衝撃に読者・視聴者がせつかつたのであり過ぎ、ゆっくりに調べている心まがなない。いじめにしても体罰にしても関係者に話を聞くのが非常に難しい事情もあるでしょう。しかし、まずよく調査をして事実に基づいて個別にストーリーを発見して書くべきなのです。せつかな良心は事態を悪くするだけです。中西 諏訪さんが言っているように、生徒が学校という場所そのものを否定してしまつとき、もう学校としては対応のしようがない。学校が成り立つ文化的支えが揺らいでいる。それは日本の親たちの間にも表れている。こんな事件に関する週刊誌の記事を読んでも、そういうことを感じます。山平 小林篤さんの「清輝君いじめ自殺」の決算(現代)は一つの「物語」として読めばいいでしょう。橋川 これは随分よく取材したものだと思いました。

後書き

社会党の新党問題と自民党の裁選が同時並行で進み、日本政にかかわる報道や評論が少し活を取り戻したようです。とはいっても、政治好きな総合誌でさえ、また集が組まれるほどではあありません。そのようなかた、Ronzeが社会党を応援する形で「第三特集」をしていたので、これが座の議論の中心になりました。社会党にとって「現実的な主義」というのは言い古された問題です。大ざっぱに言えば、西民主義流の政権担当が可能な現実的プランが、威勢がいいが非現実的な社会主義路線に敗北したのが同党の路線闘争の歴史だと思えます。その意味で「第三極」特集の社説論議は古びたトドを聞き直しているようにも思いますが、中西さんが指摘する現代的意義も含まれているはず。しかし、新党論議を通じて、この党のどうしようもない古びた論議の難さを改めて感じました。この党が生き残るかどうかは、すれにしても次の総選挙で有権者が決めることになりそうです。(雅)



